

対人関係の親密化過程に関する 質的データに基づく一考察^{1) 2)}

山 中 一 英³⁾

問 題

対人関係の親密化過程に関しては、従来より大別して2つの考え方が存在する。まず第1に、Altman & Taylor (1973) の社会的浸透理論 (social penetration theory) に代表されるような、対人関係の親密化過程を段階的プロセスとする主張である。Altman & Taylor は、対人的交換は、内容の領域に関する「広さ (breadth)」と親密性のレベルに関する「深さ (depth)」という2次元で行われ、対人関係が進展するにつれ、狭い領域での表面的な相互作用から広い領域での親密な相互作用へと段階的にかつ系統的に進行していくと仮定した。つまり、対人関係の親密化過程を、徐々に変化を示す段階的プロセスとしてとらえているのである。これと対照的に、第2の考え方として、Berg (1984)、中村 (1989) などに代表される、ある対人関係の親密化可能性はその形成期において決定されるとする主張である。つまり、ある関係の出会いからのきわめて初期の対人的相互作用の様態が後続の相互作用の型を決定し、ひいては関係そのものの発展または崩壊の方向を運命づけてしまう (中村, 1991) というのである。このような現象は、関係性の初期分化 (early differentiation of relatedness) と呼ばれている。

山中 (1994) は、先行研究では検討されてこなかった出会いからきわめて短い期間に焦点を当て、大学生の対人関係の親密化過程を、縦断的にデータ収集することにより検討している。それによれば、出会ってわずか2週間というきわめて短期間のうちに、将来の関係の親密さを予測できる関係の分化が生起していることが明らかになり、対人関係の親密化過程は関係性の初期分化現象を

示すと結論づけている。さらに、山中・廣岡 (1994) も、これと同様の結果を得ており、約8ヶ月後という長期的な関係においても、出会ってわずか2週間で予測することが可能であることを示している。

また、対人関係の親密化過程に関する研究は、その方法論的困難さもあり、必要性が叫ばれながらもそれほど多く行われてきていない。しかし、数少ない先行研究の中で、対人関係の発展過程を最も体系的に検討した研究としては、大橋ら (1982) のものをあげることができよう。大橋らは、中学生を対象として、個人のセンチメント関係、パーソナリティ認知、個人間の相互作用の量、集団の特徴など多種多様な検討を加えている。とりわけ本研究の文脈において興味深い知見としては、中学生を対象とした彼らの研究においても、学級編成の直後においてさえ、すなわち、級友としてのその存在を意識するかしないかという出会いの極めて初期の段階において、他成員に対するセンチメント関係が既にかなり明確に分化していたことが示されているのである。もっとも、大橋らは、それは時日の経過とともに次第に変容していくものとしているが、相手の諸側面を十分に認知できるほど、十分には相互作用をしていない時点でさえ、相手に対するセンチメントを分化させていたことは事実であり、このことが後に安定してくる対人関係の基礎をなすものであるとも彼らは記している。

以上の結果を総合的に判断するならば、従来考えられてきたように、相互作用を重ねながら、親密な関係とそうでない関係とが段階的に分化していくというよりも、将来の対人関係の親密化可能性は出会ってきわめて短期間のうちに決定されてしまうと判断することが妥当であるように思われる。

しかし、筆者の研究を含め、これまでの対人関係の親密化過程を縦断的データをもとに検討した研究は、そのほとんどが量的指標を用いたアプローチによるものであった。つまり、評定尺度を使い、統計的手法により分析を加えるというアプローチである。量的アプローチは、あらかじめ研究者側が被調査者に反応の枠組みを与えるた

- 1) 本研究は、三重大学教育学部廣岡秀一助教授との共同研究の一部をまとめたものである。
- 2) 本研究の一部は、日本グループ・ダイナミクス学会第43回大会で発表されている。
- 3) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程 (後期課程)

め、得られる知見はどうしてもその枠組みの中にとどまらざるを得ない。しかも、これまでのところ量的アプローチに基づく知見も十分にあるとは言い難い状況である。したがって、もう少しナイーブな指標を用いて、対人関係の親密化過程にアプローチする必要があると思われる。

そこで、本研究では、探索的に面接法を用いた質的アプローチによって、対人関係の親密化過程を検討することを目的とする。面接法を用いれば、友人関係の実態、友人関係やインフォーマル・グループの成立・発展の契機などに関する、当事者自身の判断の枠組みによる言語的説明を得ることができるからである。すなわち、面接法によるアプローチは、被面接者の自由な判断の枠組みによる広範な応答を得ることを可能にし、それによって従来のアプローチでは見いだされなかったような、対人関係の成立・発展過程に関するより深い考察を可能にするという意味を有しているのである。

また、筆者の従来の研究は、被調査者1名につき特定の同性の人物1名を想起させた上で、対人的相互作用の様態に関する資料を収集するという方法をとっていた。しかし、この方法では、一対一の関係についての資料を得ることはできても、多くの人物の中からもなぜその1名が選択されたのかということに関する資料は得ることができなかった。本研究においては、面接法を用いることで、小集団の中で、個々人が何を基準にして友人を選択しているのかということに関する資料を収集することも可能となろう。

方 法

被面接者

1995年度国立M大学教育学部教育心理学専攻新入生11名(女性8名,男性3名)。なお、この11人は1つのクラスを構成しており、入学直後からこの11人で種々のガイダンスを受けている。したがって、入学当初の相互作用は11人の中で行われている可能性が高い。クラスとしての意識は強く、凝集性も高いと思われる。ちなみに、この11人だけで行われる授業が必須として週に1回ある。

面接実施日

入学式の約1ヵ月後の1995年5月8日(月)～5月11日(木)。筆者が個別に「大学生活に対する適応過程」に関心を持っているとして実施した。1人につき10～15分を要した。被面接者に了解を得た上で、面接内容をテープに録音した。

質問内容

“大学に期待してきたこと”, “大学の授業の感想” など、真の目的を隠すための質問を含め、12, 3項目程

度であった。本研究の分析対象となる主な質問は以下の4つである。①専攻内での友だちの有無。②友人関係成立の契機。③専攻内での“友だちグループ”の有無。④“友だちグループ”成立の契機。

結 果

1. 専攻内での友だちの有無

“友だちはできましたか”という質問に対し、1人の女性を除き、友だちがいると回答した。入学して約1ヵ月の時点においてすでに友だちと呼べる人が存在していることを示している。さらに、友人選択の時期について興味深い回答が得られた。「(入学して)一番最初の日に、(相手が)1人座ってたから、話に行ったら、それですってって感じ」, 「その友だちとは入学式の日からかな」などの反応である。こうした反応は、入学式の時点、つまりきわめて初対面に近い時点ですでに友人選択がなされ、友人関係が成立していることを示唆するものと考えられよう。

2. 専攻内での“友だちグループ”の有無

本研究では、対象となった男子学生は3名のみであることから、ここでは女子学生8名を対象とした結果を中心に記述していくことにする。

従来より、女子青年は、特定の仲良しグループ、いわゆる“友だちグループ”を作る傾向にあることが指摘されている(佐藤・落合, 1993など)。“友だちグループ”内の成員間のセンチメント関係と成員間が親密であるかどうかといった点については、さまざまな議論の余地があるところであると考えられる。しかし、Berscheidら(1989)によれば、親密な関係とは、対象人物と一緒に過ごした頻度(frequency)が多く、一緒に行った行動が多様で(diversity)、対象人物から強い影響を受ける(strength)関係であると定義される。したがって、この定義に従えば、“友だちグループ”構成員どうしは親密な関係にあると判断しても差し支えないであろう。ここでは、こうした“友だちグループ”の成立・発展過程を検討していくことにより、対人関係の親密化過程に有益な知見がもたらされるものと期待される。

本研究において、入学して約1ヵ月の時点においてすでに、すべての対象者が専攻内に“友だちグループ”が存在していると答えた。また、彼女らが専攻内に存在すると述べたグループの数と各グループの構成員名は、被面接者間で一致していると判断可能であった。

さらに、いつごろ“友だちグループ”に分かれるのかという質問に対して、ある被面接者は「もう入学式の時点では何となく分かれてしまう」と述べている。これ

は、上述した友人選択の時期とも一致している。さらに、その被面接者は「なんだかすぐ（グループに）なってしまふ。まだ一番はじめだったからいろんな人と話してなかったから、自分は勝手にもう決めつけてもうこのままだったらイヤだと思って。なんかもうそれがすごくつらくて」と興味深い応答をしている。このことは、この被面接者が、大学に入学して、親しい友だちとなる可能性のあるさまざまな人との相互作用をする以前に、特定の人とインフォーマル・グループを形成していることを示している。

3. 友人関係、及び“友だちグループ”成立の契機

親しい友だちとして特定の人物名をあげた被面接者は、その人物と“友だちグループ”を構成していたため、友人関係成立の契機及び“友だちグループ”成立の契機という2つの質問に対する回答を総合して記す。

「自然に、何となく。気が合った」などという回答もあったが、各グループに何らかの類似性があることを指摘した回答もあった。「下宿である」、「帰る方向が同じである」、「推薦入試で合格した」、「同じ授業を受講している」などの類似性である。このことは、類似性をもとに友人選択がなされることを意味している。

また、次のようなきわめて興味深い回答も得られた。「（友だちグループになぜ分かれるのかという質問に対して）なんでだろう。まあ1人がイヤっていうのもあるんでしょう。何か知らないけどいつのまにか分かれてしまって、新しいメンバーが入っても、やっぱり今までのメンバー優先で。なんていうのかよくわからないです。（中略）でも、1人じゃイヤっていうのがあるのかな。1人でいると何か『ああ、あの人1人なのね』って見るでしょ、みんな。そう見られるのもイヤっていうのもある」という回答である。つまり、“周囲の人から1人でいると見られたくない”という要因によって、出会いからきわめて短期間に友人選択をし、将来の関係の親密化可能性が決定されてしまう可能性があることを示唆している。

4. 特徴的な事例⁴⁾

ここでは、きわめて興味深い特徴的なペアに関して記述する。人物Aと人物Bは、「ともに推薦入試で合格」、「帰る方向が同じ」という類似性をもとに友人関係を成

立させたと推測される。

まず、Aとの特徴的な面接内容を記述する。

面接の冒頭の「大学生活を始めてどんなことがたいへんですか」という質問に対して、「人間関係が一番つらかったです。今はだいぶなれてきたんですけど」と回答。具体的にその内容を質問してみると、「推薦入試の時に友だちになった子と再会して、ずっと話しているうちに、その子は人の文句とかをよく言う子で、自分と合わないなって思いましたんですよ。で、その時にはもうすでに、やっぱりクラス的に友だちっていうのが固まってきていて、ここは自分と合わないかもしれないとか、思ったこともありましたが」、さらに、「ずっとだいたい行動している子はちょっと自分と考え方が違って、ずっといれないかもしれないっていう子で、他の子と仲良くなりたいって思っても、やっぱりグループとかできませんでしょ。もしもこの状態がずっと続くと、4年間つらいかなって」と述べている。しかし、「日にちが経つにつれて全員が仲良くなって、今はここでよかったって思ったんですけど」という回答であった。

次に、Bとの特徴的な面接内容を記述する。

Bは自分を「1人でいても全然気にならない」人間であると言い、「人との関係はわずらわしい」と感じている。しかし、BのパートナーであるAはBと一緒に行動をしたがっている。そういうAをBはいささかわずらわしく感じていることもあるようだ。例えば、「仲の良い子が一緒にご飯食べに行こうと、まあそれは協定みたいな。行こ行こって言わなくても、一緒に行くっていうきまり」、「私はその時間はちょっといやなんです。ご飯とか1人で食べるのはさらにわびしいけど、人と群れて食べてるのもなんかなくて。食べてる間にしゃべらなきゃいけないでしょ、そういうこととかも面倒くさい」と述べている。さらに、「わずらわいですね。1人で行動したいですよ。私は初め授業をとるときでも自分の好きなものを全部チェックしてたんですよ。だけど、その周りの子は先輩に教えてもらったとか、とりやすい授業とかで、ずっと時間割くんだんですよ、その私の一番仲のよい友だちが、『みんなこれにしたらどうする』って聞くんですよ。『私これがいいからそれとらない』って言ったの。その子はそっちに行こうか、私と一緒にしようか迷ってて、だいぶ迷ってたみたいで、結局私とほとんど一緒なんですけど、そういう周りに流される子、もう苦勞です、これ。私はこれを、じゃああなたそっちに行けばいいじゃん、わたしこれとるからっていう、それが言えない」と述べている。

このペアの反応は、次のことを意味していると考えられる。つまり、いったん何らかの類似性をもとに友人関

4) こうした特徴的な事例を記すことは倫理的には望ましいことではないかもしれない。しかし、事実を明らかにするために、できる限りプライバシーに配慮した上で記述をした。

係を成立させたペアは、どうしても選択した人物と親密にならなければならないのである。A と B は、ともに推薦入試で合格したという類似性をもとに、おそらくそれほどの相互作用を重ねることもなく、関係を成立させただろうと考えられる。しかし、入学して約1カ月の時点でA はB と対人関係に対する態度が異なっていることに気づき出す。ところが、A はB との関係が崩壊させることはできない。なぜなら、「クラスの友だちってというのが固まってきていた」からである。つまり、すでにその時点において「関係が顕現化(大橋, 1958)」していたからである。したがって、その時点におけるA の心理状態はきわめて不均衡な状態にあったことは容易に推測可能である。Heider (1958) のバランス理論に従えば、A は均衡状態に達するように、認知を変化させるよう動機づけられているだろう。A の発言の中にも、認知的一貫性を保つよう認知を変化させていると思われる箇所が存在する。以下はそのことを示唆させる面接者とのやりとりの一部である。

………

「A : (略) なんかもうそれがすごくつらくて。つらいときありましたけど、今はもうそんなことないですけど」

「面接者 (I) : ああそうですか」

「A : はい」

「I : それは今はもうその友だちってというのが？」

「A : いろんな人と話すようになって」

「I : 友だちの方も変わってきた？」

「A : はいはい」。

………

このように、「B の方もいろいろな人と話すようになって変わってきた」として、A が、Heider の図式で言うところの、P によって認知されたO とQ の関係、つまりB の対人関係に対する態度が変化してきたとA 自身の認知を変化させている。要するに、たとえ自分と他者の考え方、つまり態度が類似していなくても、一度形成した関係は決して崩壊させようとしなない。逆に言えば、選択した友人とはどうしても親密にならなければならないのである。ここで記したA とB のペアのように、何とか認知的一貫性を保ちながら友人関係を維持していこうとするのである。

ここで、これまで記してきたことと若干重複する部分もあるが、このクラスの残り6名の事例について簡単に列記しておく。残り6名の中に、2つの“友だちグループ”が存在している。

まず、人物C とD のペアについて記述する。C とD はともに自宅生である。親しくなったきっかけを質問し

たところ、C は、「きっかけってというか、一番最初の日に、1人座ってたから、話に行ったら、それでずっと感じて」、「なんか私他の子と一緒にいたんだけど、その子『ちょっとトイレ行ってくるね』って言って、なんか1人になっちゃったなって思ったら、Dさんがそこにいて、で話しかけたら、ていう感じ」と答えた。一方のDも、「クラスの先輩との顔合わせみたいなちっちゃなコンパみたいなんがあったんやけど、そんときに決められた教室に私が行ことしたときに、Cさんがおって、私も今から行くところって言って、それじゃ一緒に行こかって、なんかそっからかな。そんな感じ。なんとなく」と答えている。またこのクラスの別の人物H は、C とD のペアについて「授業とかの関係」でグループになっていると語っている。これらの回答から、C とD の2人も、「入学直後のコンパに一緒に行った」あるいは「授業が同じ」といったようなささいなことの類似性によって関係を成立させていると推測される。

次に、人物E, F, G のグループについて記述する。E, F, G はみな下宿生である。3人がグループになっている理由について、E は、「3人とも下宿なんで、なんかもずっと一緒って感じ」、「同じ時間が多くて、自然に」と答えている。彼女らも、「下宿である」というささいなことの類似性をもとに関係を成立させ、ずっと行動を共にしているのであろう。F の「だいたいその3人で授業もほとんど一緒だから、こうまわっているって感じ」という発言からもその様子がかがえる。山中(1994) は、Companionship, Communication, Consideration, Affection という4つの行動領域を設定し、対象人物との関係を親密にするための行動を検討している。その結果、女性の場合、4つのすべての行動領域が対人関係の親密化にとって重要であるという知見を得ている。彼女らが答えた「ずっと一緒に行動している」という反応は、この知見と符合するものと考えられよう。

そして、人物H であるが、彼女は「大学に入って、ずっとほんとになんかこう一緒に帰るとかそういう子が、まだあんまり特定されてなくて」と答え、どのインフォーマル・グループにも属していないようである。自分のことを「今はなんか結構クラゲさん状態でふよふよって感じ」と称している。クラスの他のメンバーも彼女のことを「まああっち行きこっち行って感じ」、「この子は結構誰とも」と言っていたりする。しかし、孤立しているという様子ではない。H 自身「自分あんまりそういうの(グループ)に固執ってというか、あんまりしてなかった」とも述べている。「月曜日は全部授業が一緒」ということもあり、上述の人物E, F, G で構成されている

インフォーマル・グループと比較的行動を共にすることもあるようだが、H自身の「3人とも下宿生なんで、私1人下宿じゃなくて自宅やから、ばって一緒に帰ろうって言っても、私は電車の方向に帰らなあかんけど、他はみんないける。ということでちょっと最後までは」という発言から推測されるようにグループの構成員とまでは至っていないようである。もともと彼女は、地元出身のため、1年生だけで大学内に同じ高校出身者が「教育学部だけで10人か、全体的だと50名くらいいる」こともあり、クラス内で友人関係を形成させたいという動機づけが他の成員に比べ高くないのではないかと推察される。

参考までに、男子学生の様子も記述しておく。男子学生は3人しかいないということもあり、「友だちにならざるを得ない」と感じているようである。また、「教育学、教育心理学で入ってきてるんで、授業受けるにしても、教育学の連中も一緒に徒党になって座ってたりする」、「お昼ご飯食べるときに（教育学の人と）一緒に食べたりとかしてる」という発言のように、男子学生の場合は人数の少なさゆえ、他専攻の学生も一緒に行動していることが多いようである。したがって、本研究が対象としたクラスの男子学生は、女子学生ほど、クラス内での友人関係、インフォーマル・グループに固執していない様子である。

考 察

1. 友人関係成立の時期

入学式から約1カ月経過した時点において、1人の女性を除き、友人が存在していた。それどころか、入学式の時点、つまりきわめて初対面に近い時点においてすでに、友人選択がなされ、友人関係が成立している可能性が示唆された。しかも、“友だちグループ”成立時期に関する反応からは、親しい友だちとなる可能性のあるさまざまな人との相互作用をすることなしに、友人選択がなされる様子が推察される。

2. 友人関係成立の契機

「下宿である」、「帰る方向が同じである」、「推薦入試で合格した」、「同じ授業を受講した」などの類似性をもとに友人選択がなされる可能性が示唆された。こうした類似性は広義に解釈すれば、対人魅力の規定因としての態度の類似性（長田, 1987など）の一部と考えられるかもしれない。しかし、これらの類似性は、その時点で入手しやすい表面的な情報の類似性であり、こうしたいわば“ささいな”ことの類似性が関係成立時点では大きく作用していることを示唆していると考えられよう。

Berg & Clark (1986) は、“early decision-making

(初期意思決定) and differentiation (分化)”という言葉を用い、ある対人関係の親密化可能性はその形成期において決定されると主張した。本研究において見いだされた、きわめて初対面に近い時点での、入手しやすい“ささいな”情報の類似性によってなされる友人選択が、Bergらの言う“初期意思決定”に相当すると考えられるかもしれない。

3. 関係性の初期分化現象の生起理由

山中 (1994) は、関係形成の初期に将来の関係の親密化可能性が決定されてしまう原因として、予言の自己実現の効果をあげているが、本研究において見られたこのような反応は、こうした原因の他に、“周囲の人から1人で見られると見られたくない”という要因がある可能性を示唆しているものとして解釈できる。これに関連して、三島 (1994) は、「女子の場合、小学生から高校生まで一貫して『友だちが自分のことをどう思っているのか』ということをかかり気にしている」ことを明らかにしている。本研究の結果は、大学生を対象とした場合にもこうした傾向が認められることを示している。

大坊 (1995) は、対人関係親密化の過程における感情の中心をなすものは、自尊感情と親和感情であると述べている。また、長田 (1990) は、个性的でなく自己概念のあいまいな日本人は、自己概念自体を明確にする代わりに、抛りどころを同類の群れ（集団）に求めて、そこでのアイデンティティを自己概念の中核に据えているところがあると記している。こうした知見をもとに考察すれば、本研究で見いだされた“周囲の人から1人で見られると見られたくない”という要因は、出会いの直後できるだけ早く他者との関係を形成することで、自己をとりまく集団からある種の社会的承認を得る、つまりアイデンティティを獲得することによって、あいまいな自己概念を安定したものとしようとする傾向の現れととらえることもできよう。本研究において、日本人の対人関係に特徴的な要因が、関係性の初期分化現象を生起させる1つの理由となっている可能性が示唆されたことになる。今後の検討課題としたい。

4. 対人関係の親密化過程に関する一考察

本研究で得られた知見から、対人関係が親密化するプロセスに関して、以下のような推察が可能となろう。一般に、大学入学直後は、友人関係形成への動機づけが高まっている状態であると考えられる（諸井, 1986など）。事実、本研究においても、面接の冒頭での「大学生活を始めてどんなことがたいへんですか」という質問に対して、即座に「人間関係をつくること」と答えた被面接者

がいたことからもうかがえる。この時期に、人は自分との類似情報を持った他者を探索する。そして、自分と類似している（と判断した）他者と対人関係を形成しようとする。このプロセスは出会いからきわめて短期間のうちに行われる。友だちが自分のことをどう思っているのかを気にして、他者から“あの子は1人である”と思われたくないからである。つまり、こういった課題は短期間のうちに行われなければならないことを示している。

そして、もちろん客観的に判断すれば、短期間であるため、特定の他者に関して多くの情報を得ているわけではない。しかし、ささいな情報しかないにも関わらず、関係を成立させてしまうのである。要するに、従来考えられていたように、種々の対人情報を判断しながら対人関係が親密になっていくのではなく、出会いの初期に、ささいな類似性（ナイーブな被面接者はそう思っていないかもしれないが）だけで友人選択が行われる可能性を示唆している。

さらに、ひとたび友人選択がなされると、選択された人物とどうしても親密にならなければならないのである。対人関係の親密化過程を段階的プロセスととらえている立場の種々の理論が仮定しているように、相互作用を重ねながら、親密な関係とそうでない関係が分化されていくということではない。まず、最初にささいなことの類似性に基づいて親密になるべき（親密にならない）ターゲットを決定してしまうのである。これが Berg & Clark (1986) の“初期意思決定”に相当するかもしれないということはすでに述べた。そして、そのターゲットと親密になることがあたかも義務づけられたかのように、親密になるための相互作用を展開していく。そのターゲットが自分にあわないと思っても他のターゲットを探したりはしない。その過程においては、たとえ認知的に不均衡な状態が生じたとしても、決して関係を崩壊させることなく、認知的一貫性を保つよう認知を変化させながら関係を維持していくのである。特徴的な事例で記述した、A と B のペアはまさにそのことを如実に示している。

近年、青年の友人関係において、「本音の話」や「人生いかに生きべきか」といった内面的な自己開示の減少が指摘されている（和田，1990）。本研究で得られた知見はこの傾向を説明する1つの理由を提供していると考えられよう。つまり、まずはじめに親密になる人物が決められてしまい、その人物とどうしても親密にならなければならないということが前提としてあるため、相手を傷つけてしまう恐れのある、あるいは自分をさらけ出すことで相手に拒否される危険性のある自己開示は恐くてできないと考えられるのではないだろうか。

本研究で得られた、ささいなことの類似性に基づいて友人選択がなされるという知見は、従来より提唱されてきている、いくつかの対人関係の発展過程に関するモデルの比較的最初の段階に相当することであるのかもしれない。例えば、Levinger (1983) の A, B, C, D, E の5段階モデルにおける A 段階である。この第1の段階である A (acquaintance) 段階は、相手の存在に気づく時期であり、物理的・社会的環境が強い影響を及ぼすとされている。あるいは、互いに面識のない17名の入寮男子学生を対象に、16週間にわたって、親密化の過程を体系的に追跡調査した Newcomb (1961) のものである。Newcomb によれば、入寮当初においては、部屋が近い者同士が親しくなった、つまり近接性の要因が親密さに影響していることが明らかにされている。この部屋が近いという要因もささいなことの類似性と考えることができよう。本研究の知見は、この Levinger や Newcomb の知見をあらためて記したにすぎないのかもしれない。

しかし、本研究でなされた考察が従来のモデルと基本的に異なる点は、この出会ってきわめて初期になされる友人選択がその後の関係や相互作用の展開に実に大きな影響力を及ぼしているのではないかという視点に立脚していることである。関係性の初期分化現象（山中，1994；山中・廣岡，1994など）は、対人関係の親密化過程における出会い初期の（その後の展開を方向づけるものとしての）影響力の大きさを意味しているに他ならないのである。しかし、本研究においてはこのことを明確に実証するデータを提出することはできない。Newcomb (1961) も、その後時間経過に伴い、類似した態度を持つ者同士が親しくなっていくことを示している。したがって、こうした点について、今後も、関係をできる限り長期にわたって追跡するなどして、更に注意深く直接的な検討を加えていく必要があるだろう。

最後に、本研究の主たる目的は、従来のような量的アプローチではなく、面接法を用いた質的アプローチに基づいて、対人関係の親密化過程に検討を加えることであった。被面接者の自由な判断の枠組みによる広範な応答が得られたことによって、上述したような考察が可能となった。こうした考察は、従来の量的アプローチによってはなされ得なかったものであり、質的アプローチをとったことの意義は大きいと言えよう。

繰り返しになるが、これまで記してきたことは、少数の被面接者を対象とした、いわば事例研究であり、推論の域を脱するものではない。したがって、本研究で示唆されたさまざまな知見の一般化可能性については今後の検討を要することは言うまでもないことである。

引用文献

- Altman, I. & Taylor, D. A. 1973 *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- Berg, J. H. 1984 The development of friendship between roommates. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 346-356.
- Berg, J. H. & Clark, M. S. 1986 Differences in social exchange between intimate and other relationships: Gradually evolving or quickly apparent? In V. J. Derlega & B. A. Winstead (Eds.), *Friendship and social interaction*. New York: Springer-Verlag. Pp. 101-128.
- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M. 1989 The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 792-807.
- 大坊郁夫 1995 社会的脈絡における感情の相対性 北星学園大学文学部北星論集, 32, 1-18.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley. (大橋正夫訳 1978 対人関係の心理学 誠信書房)
- Levinger, G. 1983 Development and change. In H. H. Kelley, E. Berscheid, A. Christensen, J. H. Harvey, T. L. Huston, G. Levinger, E. McClintock, L. A. Peplau, & D. R. Peterson, *Close relationships*. W. H. Freeman and Company. Pp. 315-359.
- 三島浩路 1994 友達・親友の人数を規定する要因についての報告 日本グループ・ダイナミックス学会第42回大会発表論文集, 150-151.
- 諸井克英 1986 大学新入生の生活事態変化に伴う孤独感 実験社会心理学研究, 25, 115-125.
- 中村雅彦 1989 大学生の友人関係の発展過程に関する研究(1) —関係性の初期差異化現象に関する検討— 日本グループ・ダイナミックス学会第37回大会発表論文集, 65-66.
- 中村雅彦 1991 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究, 31, 132-146.
- Newcomb, T. M. 1961 *The acquaintance process*. New York: Holt, Reinhart, & Winston.
- 大橋正夫 1958 選択行動と对人的知覚の研究(Ⅲ) —関係知覚における集団構造化の要因— 心理学研究, 29, 9-19.
- 大橋正夫・鹿内啓子・吉田俊和・林 文俊・津村俊充・平林 進・坂西友秀・廣岡秀一・中村雅彦 1982 中学生の対人関係に関する追跡的研究—センチメント関係と学級集団構造— 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 29, 1-100.
- 長田雅喜 1987 対人魅力の成立と発展 大橋正夫・長田雅喜(編) 対人関係の心理学 有斐閣 Pp. 106-128.
- 長田雅喜 1990 母子密着と日本人の対人関係の特徴 名古屋大学環太平洋問題研究会(編) 環太平洋圏における文化的・社会的構造に関する研究 Pp. 219-231.
- 佐藤有耕・落合良行 1993 女子高校生のグループの成員数と友人とのつきあい方の関係 筑波大学心理学研究, 15, 185-193.
- 和田 実 1990 青年の対人関係の変容 久世敏雄(編) 変貌する社会と青年の心理 福村出版 Pp. 83-102.
- 山中一英 1994 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, 34, 105-115.
- 山中一英・廣岡秀一 1994 大学生の対人関係の親密化過程に関する研究(4) 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 306-307.

(1995年9月13日 受稿)

ABSTRACT

A Qualitative Approach to the Developmental
Process of Interpersonal Relationships

Kazuhide YAMANAKA

The purpose of this paper is to consider the developmental process of interpersonal relationships among college students by a qualitative approach. Eleven freshmen were interviewed.

The following results were obtained. At a month after the first meeting, they had already the close friends. In addition to this, there were some informal groups. Further, it suggested that they picked friends by the trivial similarity even at the first meeting.

It follows from what has been said that at an early point of a relationship, nearly the first meeting, people are judging about whether a relationship will be close by a trivial similarity. Viewed in this light, the relationship development process can be regarded as the early differentiation rather than the gradual process.

Key words: intimacy, relationship development, friendship, similarity, qualitative approach.